



## 大量の廃材から発想して アクセサリ作りへ

木上さんは、端材や廃材を使ってアップサイクルアクセサリを作り、アクセサリブランド「KiNaKo」を運営している。

「作り始めたのは2015年頃。当時、建築設計事務所に勤めていて、現場に行く機会があり、そこで見た廃材などの量の多さにびっくりしたんですね。もっと出さないようにできるのでは、まだ使えるのになんで廃材なんだろうと思い、これを使って何かできることがあるのではと、事務所を辞めたタイミングで廃材を使ったアクセサリ作りを始めました」

建築設計事務所でつながりがあった建築資材メーカーや工場ですら廃材や端材を使用し、アクセサリを制作する木上さん。ものづくりのルーツは幼少期まで遡る。

「子どもの頃に祖母が亡くなり、住んでいた家が解体されました。そのとき、何か形見になるようなものを残せなくて、とても後悔したんですね。その思いが今につながっているのかもしれない」

また、アクセサリ作りを始めたのは、洋服などを手作りしていた母の影響もあるという。「一緒に布を選びに行って『ここにリボンつけて』などと言って、作っている様子を見ていたものです。ものを大切に使わなければいけないという考え方が自然と身につき、作ることに興味があって、子どもの頃からビーズなどを使ってアクセサリを作っていました」

さらに、木上さんには子どもの頃から今につながる“収集癖”があった。「保育園に通っていた頃からゴミは宝だと思っていて、タイルのかけらや錆びついて曲がった釘などを拾っていたんですね。それは今でも続いていて…何か“ゴミについて語る会”みたいな催しはないですかね(笑)」

タイルとアルミを使ったアクセサリやアクリルと木材を組み合わせたバングル、ヴィンテージタイルのイヤリング・ピアスなど、あらゆる建材を組み合わせたアクセサリ作り。制作する際のこだわりについてこう語る。「ものの形状や特性を崩さないことです。たとえば、タイルに上から色を塗ったりはしないなど、特徴や色味、マテリアルによってはその機能も生かしていきたいと思っています」

## タイルには、歴史や文化を読み取る魅力がある

さまざまな建材を扱う中で、木上さんはタイルが最も好きなマテリアルだという。

「小さい頃から集めていて、感覚的に好きだという部分はありますが、大人になっていろんなタイルを見て、国や地域によって色や形状、質感などが異なることを知り、とても魅力を感じました。一つのタイルから歴史や生活、文化を読み取ることができるって、ほかの建材にない面白さだと思います。旅先でタイルを見て回るのも楽しみの一つで、たとえばヨーロッパでは、デザインセンスはあるけど施工精度が低いものもあって、そういうのをふらふら歩いて見つけるのが面白いですね。日本では、古いタイルを見て、形状や色、質感から、当時の流行などを読み取ったりします」

アクセサリ制作のかたわら、建築家として建物の内装も手掛ける木上さんは、長江陶業東京営業所の空間デザインを担当。落ち着いた色合いのウォールタイルを用いた、高さ異なる3つの可動式什器と、入口周辺のディスプレイの製作にも携わった。

「空間の奥行きを生かしたデザインにしたいと考え、什器に高低差をつけて抑揚を加えました。高・中の什器はカウンターや打ち合わせなどのテーブルとして、低い什器はベンチやパンフレットなどをディスプレイするボックスとして使えます。入口周辺のディスプレイは、タイルの原料となる粘土を用い、写真パネルと組み合わせて、タイルの原点から製品化に至るまでのストーリー性を表現

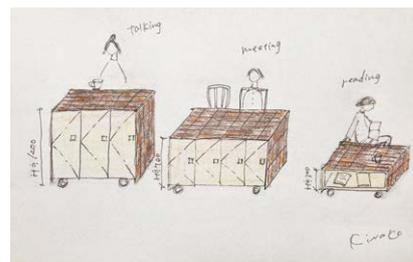
しました」

木上さんは、多治見市を訪れ、タイル作りの現場を目の当たりにした経験がある。

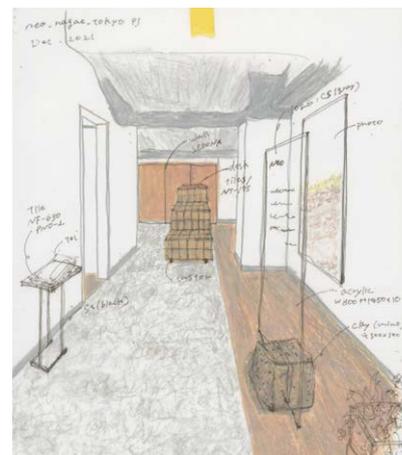
「工場でタイルが作られる工程を見ることができ、とても面白かったですね。もう一度多治見に行って、そこに根付いた文化に触れたいと思っています」

木上さんは、アップサイクルやサステナブルといった環境課題を意識しながら、端材や廃材を用いた創作自体を楽しんでいるように見える。今後の目標について聞いてみた。

「世界中の廃材を集めてアクセサリ作りをしたいですね。逆に廃材を使ったアクセサリを通じて、日本の文化を海外に伝えたいという思いもあります。国を超えた廃材の架け橋のようなことをやっていきたいですね」



※初期段階におけるイメージスケッチ



※仕上げ検討用スケッチ



photo:Takuya Horiguchi